

令和 2 年 6 月 23 日現在

機関番号：33919

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04888

研究課題名(和文) 教師が日常的に活用できる「かかわりの力」育成プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of "Program to promote relationship" that teachers can use on a daily basis

研究代表者

曾山 和彦 (SOYAMA, KAZUHIKO)

名城大学・その他部局等・教授

研究者番号：50454418

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：学校不適應(いじめ・不登校)の予防・改善策として、教師が日常的に活用できる「かかわりの力」育成プログラムの開発を目指して3年間取り組んだ。研究協力校(小中各2校)での実践データ検証を重ね、「短時間グループアプローチ」「各授業におけるペア・グループ対話」の2本柱からなるプログラム(simple program=slim & simple program)が完成し、その成果を単著として発刊した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で開発した「かかわりの力育成プログラム」は、先行研究で適應感への影響が示唆される自尊感情とソーシャルスキル育成に焦点を絞ったものである。週1回10分で行う「短時間グループアプローチ」と各授業における「ペア・グループ対話」によって構成されるプログラムであるがゆえに、昨今、教師の多忙感が取り沙汰される学校現場においても、十分活用可能である。研究協力校の実践においては、学級適應状況の改善が多く報告されている。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop program that focuses on feeling of school adaptability over three years. This program is intended for elementary and junior high school students, and is easy for teachers to use on a daily basis. In addition, this program consists of a short time group approach and pairwork in various classroom situations. The results of this study were published in 2019 as an educational book.

研究分野：生徒指導

キーワード：自尊感情 ソーシャルスキル 中1ギャップ グループアプローチ ペア・グループ対話 学校不適應予防

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

学校教育において憂慮されている問題の一つに学校不適応(不登校、いじめ等)の問題がある。学校不適応の予防・解決に向け、現場の教師、多くの研究者が様々な具体方策に取り組んだり、新たな知見を提供したりしても、なかなかその成果が現れない悩ましい状況がここ数年は特に強まっている感がある。学校不適応に関する研究としては、児童生徒のストレス反応(抑鬱・不安、不機嫌・怒り、無気力、身体的反応)に焦点を当てた研究の中に、その予防・解決に向けたヒントが多く示唆されている(川西・1995、戸ヶ崎・岡安・坂野・1997、嶋田・1998)。先行研究の知見から、代表者(曾山・2010)は、児童生徒のストレス反応を規定する要因として、「自尊感情」「ソーシャルスキル」の二つを想定し、統計処理による分析・検討を行った。身体の変化に伴い、心が大きく揺れ始める「思春期」の開始に相当する小学校高学年児童194人を対象に、「自尊感情」「ソーシャルスキル」「ストレス反応」を測定する質問紙調査を実施・分析した結果、自尊感情・ソーシャルスキルの2要因で、ストレス反応の約4割(決定率36%)を説明できることが示された。それ故、児童生徒の自尊感情・ソーシャルスキル向上を目的とする教育プログラムの開発は学校不適応の予防・解決に寄与できると考えた。

2. 研究の目的

「背景」に述べた、児童生徒の自尊感情・ソーシャルスキルの乏しさは、子ども同士、子どもと教師の「かかわり」に負の影響を及ぼし、その「かかわり」の乏しさ・弱さが、学校不適応(不登校、いじめ等)を引き起こす一つの要因と言えるのではないかと考えた。そこで、本研究では、児童生徒の自尊感情・ソーシャルスキル向上を目指した「かかわりの力」育成プログラムを開発することを目的とした。様々な教育課題を抱え、多忙感に包まれる教師の多さという状況も考慮し、「児童生徒はもちろん、取り組む教師自身、負担感少なく、日常的に継続できる」という視点も重視したプログラム開発とした。具体的には、(1)児童生徒の自尊感情・ソーシャルスキルを高めるための、週1回10分で実施できる「短時間グループアプローチプログラム」の開発、(2)児童生徒の自尊感情・ソーシャルスキルを定着させるための、各教科等の授業場面における「ペア・グループ対話」の導入、という2本柱により構成されたプログラム開発である。

3. 研究の方法

本プログラムの「試行版」は既に代表者の先行研究として開発されている。本研究では、はじめに、試行版プログラムの課題を整理した後、「かかわりの力」育成プログラム開発に着手した。その後、プログラム実践協力校にて、実践及びデータ収集を通して、効果検証を行った。3年間の経緯を以下に記す。

<1年次> 児童生徒の「かかわりの力」育成プログラムの開発

「試行版プログラム」は、平成24~26年度の3年間、愛知県内の中規模公立小学校)、平成25~26年度の2年間、愛知県内の大規模公立中学校にて実践を行い、質問紙調査、行動観察による量的及び質的データをもとに作成されたものである。研究1年次は、同プログラムの課題・成果を整理し、「かかわりの力」育成プログラムを開発した。

<2年次> 児童生徒の「かかわりの力」育成プログラムの実践

プログラム実践協力校4校(小学校2校、中学校2校)を設定し、「かかわりの力」育

成プログラム実践を行った。各校の実践に対して、代表者がスーパーバイザーとして、定期的な指導助言を行った。また、プログラム効果検証に向け、質問紙調査による量的・質的データ収集を行った。

<3年次> 児童生徒の「かかわりの力」育成プログラムの効果検証

プログラム実践協力校 4 校（小学校 2 校、中学校 2 校）から収集した量的・質的データを統計的な手法によって分析し、プログラムの効果検証、及び今後の課題を整理した。

次ページに示した **Table 1** は、実践協力校の一つ A 中 3 年生（6 学級、189 名）の 6 月と 12 月の、心理尺度「アンケート Q-U」の平均値比較一覧である。6 月から 12 月にかけて全ての数値がプラス変容していることが明らかになった。また、**Table 2** は、同生徒の短時間グループアプローチに関する自由記述である（一部抜粋）。週 1 回の活動ながら、生徒同士「かかわり」を楽しみ、「かかわりの力」がついてきていることを実感している記述が多く見られた。

Table1 A中3年生（189名）のQ-U得点 6月-12月 平均値の比較

	6月	12月	t値
友人関係得点	18.20 (1.88)	18.61 (1.75)	4.11**
学習意欲得点	15.85 (3.00)	16.30 (3.39)	2.17*
教師関係得点	15.58 (3.06)	16.09 (3.19)	2.86**
学級雰囲気得点	16.59 (2.83)	17.41 (2.74)	4.13**
進路意識得点	15.46 (3.54)	16.82 (3.21)	7.30**
承認得点	37.56 (6.47)	39.64 (6.42)	5.84**
被侵害得点	14.51 (4.76)	13.57 (4.25)	3.83**

() 内は標準偏差 * $p < .05$ ** $p < .01$

Table2 A 中 3 年生の自由記述；短時間グループアプローチ（桜咲タイム）を振り返って

私は人と話し合うときに、特に相手の目を見たり、頷いたりすることが自然にできるようになった。桜咲タイムを体験して身につけてきたのだと思う／桜咲タイムはとても楽しいのでこれからも続けてほしい。普段話さない人とも話せるきっかけになる／桜咲タイムがあったから仲良くなれた人もたくさんいるし、互いのことがよくわかるようになったので感謝している／アドジャン、二者択一、いいところ探し、1 分間スピーチなどいろいろあったが、これらのおかげで社会で働く時に必要な受け答えや質疑応答の知識・マナーを身につけることができたと思う。桜咲タイムは A 中の誇り／同じテーマでもメンバーが違うと意見も違い、すごく楽しかった。桜咲タイムがあるから水曜日が好きだった。クラスのみんなども仲良くなることができ、いろいろな思い出でいっぱい／週 2 回にしてもいいくらい、桜咲タイムは楽しく、面白かった／桜咲タイムは自分のコミュニケーション能力を上げてくれた。おかげで初対面の人ともまるで友だちのように話せるようになったり、男女関係なく仲良くできるようになった／今の A 中が目されているのは桜咲タイムがあるからだと思う。社会で生きていくために必要なコミュニケーション能力向上をねらった桜咲タイムは素晴らしい活動だと思う。以前の不評を覆し、A 中をよい方向に進ませた桜咲タイムはこれからも続け、未来のためにより良い改善の努力をしていくべきと考える／桜咲タイムは授業中の話し合いの際にもとても役立ったと思う。本当に楽しかった 等 (一部抜粋)

4．研究成果

学校不適応（いじめ・不登校）の予防・解決策として、教師が日常的に活用できる「かわりの力」育成プログラムの開発を目指して3年間取り組んだ。実践協力校（小中各2校）での収集データ検証を重ねた結果、週1回10分の「短時間グループアプローチ」「各授業におけるペア・グループ対話」の2本柱からなるプログラム（slimple program = slim & simple program と命名）が完成し、その成果を単著として発刊した（書名；誰でもできる！中1ギャップ解消法・2019）。研究論文としては「小学校におけるかわりの力育成プログラムの効果」（名城大学教職センター紀要・2019）、研究発表としては「親和的学級づくりに向けた短時間グループアプローチ継続実践の効果」（日本教育心理学会総会ポスター発表・2019）がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 曾山和彦	4. 巻 16
2. 論文標題 小学校におけるかかわりの力育成プログラムの効果	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 名城大学教職センター紀要	6. 最初と最後の頁 49-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 曾山和彦	4. 巻 15
2. 論文標題 中学校入学時の学級適応促進の試み～小中連携による短時間グループアプローチの導入～	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 名城大学教職センター紀要	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 曾山和彦
2. 発表標題 親和的学級づくりに向けた短時間グループアプローチ継続実践の効果
3. 学会等名 日本教育心理学会第1回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 曾山和彦
2. 発表標題 短時間グループアプローチを活用した小中連携の効果
3. 学会等名 日本教育心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堀部要子・樋口和彦・曾山和彦
2. 発表標題 小学校におけるスクールワイドSST実践とその効果
3. 学会等名 日本特殊教育学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 曾山和彦	4. 発行年 2019年
2. 出版社 教育開発研究所	5. 総ページ数 144
3. 書名 誰でもできる！中1ギャップ解消法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----